『文選集注』江淹「雑体詩」訳注（二）

左記室（詠史）思

加藤　文彬

01 韓公淪売薬　韓公　売薬に淪(しず)み
02 梅生隠市門　梅生　市門に隠る
03 百年信荏苒　百年　信に荏苒たり
04 何用苦心魂　何ぞ用いん心魂を苦むるを
05 当学衛霍将　当に学ぶべし衛霍将
06 建功在河源　功を建つること河源に在り
07 珪組賢君眄　珪組は賢君の眄
08 青紫明主恩　青紫は明主の恩
09 終軍才始達　終軍　才　始めて達し
10 賈誼位方尊　賈誼　位　方に尊し
11 金張服貂冕　金張は貂冕を服し
12 許史乗華軒　許史は華軒に乗る
13 王侯貴片義　王侯　片義を貴び
14 公卿重一言　公卿　一言を重んず
15 太平多懽娯　太平にして懽娯多く
16 飛蓋東都門　蓋を東都門に飛ばす
17 顧念張仲蔚　顧みて念う　張仲蔚の
18 蓬蒿満中園　蓬蒿　中園に満つるを

［押韻］
○門・魂・尊・門（上平声二十三魂）、源・軒・言・園（上平声二十二元）、恩（上平声二十四痕）

［校勘］
04 **何用苦心魂**　「何為苦心魂」（陳八郎本・明州本・秀州本）
13 **王侯貴片義**　諸本すべて「王侯貴片議」に作る。
14 **太平多懽娯**　諸本すべて「歓娯」に作る。

［訳］
後漢の韓康は、薬草を売ることによって次第と世俗の中に身を置きしずめていき、漢の梅福は、市門の雑兵として身を隠した。人生の百年という時間は、まことに次々と絶え間なく進行していくものである。なぜそのような隠淪という生き方で心魂を苦しめるのであろうか。

衛青や霍去病のような人物が、黄河の源である西域で功績をたてたことに倣うべきである。そうすれば、賢君の目に止まって珪玉と組紐を与えられ、明君の恵みで青綬や紫綬を身につけることができる。

終軍はその才能を認められて、ようやく官位に就き、賈誼もまた、任用された後に位が高くなり重んじられた。金日磾と張安世は貂の尾で飾った冠をつけ、許皇后の一族、史良娣の一族は豪華な車に乗った。王や諸侯はわずかな善行でも貴び、公卿はほんの一言をも重んずるのである。

今の世は太平であって、よろこばしいことが多く、官を退

く時ですら、東の門で宴をして送別する。思い起こされるのは張仲蔚ほどの才能のある士が、蓬の生い茂る庭で身を終えたことである。

【左記室（詠史）思】

陸善経曰、晋書云、斉王冏為記室、辞疾、不就也。

陸善経曰く、晋書に云う、斉王の冏、記室と為さんとするも、疾に辞り、就かざるなり、と。

［訳］

陸善経いう、『晋書』に、「斉王の冏が左思を記室にしようとしたが、病気を理由に辞退して、職に就かなかった」とある、と。

［注］

①**晋書云**…　『晋書』（巻九十二）左思伝に「斉王冏、命為記室督、辞疾、不就。及張方縦暴都邑、挙家適冀州、数歳以疾終（斉王の冏、命じて記室督と為さんとするも、疾に辞り、就かず。張方の都邑に縦暴するに及びて、家を挙げて冀州に適き、数歳にして疾を以て終わる）」とある。

0102【韓公淪売薬、梅生隠市門】

李善曰、范曄後漢書曰、韓康字伯休、一名括休。京兆人也。常采薬名山、売於長安市。口不二価卅餘年。梅生梅福也。漢書曰、梅福一朝棄妻子去。其後、人見福於会稽者。変名姓為呉市門卒。

音決、梅莫杯反。

李周翰曰、韓伯休少立、貞操隠長安市売薬。梅子真為南昌尉。後王莽執政、乃変姓名為市門卒也。

李善曰く、范曄の後漢書に曰く、韓康字は伯休、一名は括休。京兆の人なり。常に薬を名山に采り、長安の市に売る。口に価を二にせざること卅餘年と。梅生は梅福なり。漢書に曰く、梅福一朝にして妻子を棄てて去る。其の後、人福を会稽に見る者あり。名姓を変え呉の市門の卒と為る、と。

音決に、梅は莫杯の反なり、と。

李周翰曰く、韓伯休は少くして立ち、貞操にして長安の市に隠れ薬を売る。梅子真、南昌尉為り。後に王莽の政を執れば、乃ち姓名を変じ市門の卒と為るなり、と。

［校勘］

○**常采薬名山**　「常采名薬」〈尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本〉

○**口不二價卅餘年**　「口不二價三十餘年」〈尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本〉

○**梅生梅福也**　明州本には該当箇所無し。
○**梅福一朝棄妻子去**　「梅福棄妻子去」〈建州本〉
○**人見福於会稽者**　「人見於会稽者」〈胡刻本・国子監本・明州本・建州本〉
「有見於会稽者」〈秀州本〉
○**李周翰曰**　「翰同善注」〈陳八郎本・建州本〉

［訳］
李善いう、范曄の『後漢書』に、「韓康、字は伯林、一名に括休という。京兆の人である。常に薬草を名山に於いて採り、長安の街頭で売っていた。薬草を売るときに、元々の値段を上下させることは無く、三十年の間売り続けていた」とある。梅生とは梅福のことである。『漢書』に、「梅福はある日突然、妻子を捨てて行ってしまった。その後、梅福を会稽で見たという者がいた。その人に拠れば、梅福は姓名を変えて、呉国の市門の雑兵となっていた」とある、と。
『音決』に、「梅は莫杯の反である」とある。
李周翰いう、韓伯休は若くして自立し、節操を守りながら、長安の市に身を隠し薬草を売っていた。梅子真は、南昌尉であった。後に王莽が政治の実権を握った。すると梅福は姓名を変え、市門の雑兵となった、と。

［注］
①**淪**　淪は、『説文解字』に「小波為淪。从水侖声（小波を淪と為す。水に从う侖の声）」とあり、「一曰没也（一に曰く没なり）」とある。また、魏の陳琳の詩に「沈淪衆庶間、与世無有殊。紆鬱懐傷結、舒展有何由（衆庶の間に沈淪し、世と殊なる有る無し。紆鬱して傷結を懐き、舒展するに何の由か有らん）」とある。淪は、民間のなかに隠れていくことをいう。
②**范曄後漢書曰…**　『後漢書』（巻八十三）逸民列伝に「韓康、字伯休、一名恬休。京兆霸陵人。家世著姓。常采薬名山、売於長安市。口不二價、三十餘年。時有女子従康買薬。康守價不移（韓康、字は伯休、一名は恬休。京兆霸陵の人なり。家、世々著姓なり。常に薬を名山に采りて、長安の市に売る。口に價（あたい）を二にせざること、三十餘年たり。時に女子の康に従いて薬を買う有り。康價を守りて移さず）」とある。
③**漢書曰…**　『漢書』（巻六十七）梅福伝に「至元始中、王莽顓政、福一朝棄妻子、去九江、至今傳以為仙。其後、人有見福於会稽者。変名姓、為呉市門卒云（元始中、王莽、政を顓らにするに至り、福、一朝にして妻子を棄て、九江を去り、今に至りて傳えて以て仙と為す。其の後、人、福を会稽に見る者有り。名姓を変じ、呉の市門の卒と為ると云う）」とある。

0400【百年信荏苒、何用苦心魂】

李善曰、張華勵志詩曰、荏苒代謝。漢書廣陵王胥歌曰、人生要死、何為苦心。

音決、荏而甚反。苒音冉。
呂延済曰、荏苒少時也。言人百年如少時之間。何苦心魂、自為淪隠也。
今案五家・陸善経本用為予。

李善曰く、張華の勵志詩に曰く、荏苒として代謝す、と。漢書の廣陵王胥歌に曰く、人の生まるるや要ず死す、何為れぞ心を苦しめんや、と。
音決に、荏は而甚の反なり。苒、音は冉なり、と。
呂延済曰く、荏苒は少時なり。言うこころは人の百年少時の間の如し。何ぞ心魂を苦しめ、自ら淪隠を為さんや、と。
今案ずるに五家・陸善経本は用を予に為る。

［校勘］
○**張華勵志詩曰**　「張華勵志詩」〈建州本〉
○**人生要死**　「人生悪死」〈国子監本・明州本・秀州本・建州本〉
○**何為苦心**　「何為苦也」〈国子監本・明州本・秀州本〉
○**自為淪隠也**　「自為淪隠」〈陳八郎本・明州本・秀州本・建州本〉

［訳］
李善云う、張華の「勵志詩」に、「歳月はとどまること無く進行し、移り代わっていく」とある。『漢書』の廣陵王胥の歌には、「人は生まれたら、必ず死がある。どうして心を苦しめることがあろうか」とある、と。
『音決』に、「荏は而甚の反である。苒の音は冉である」とある。
呂延済云う、荏苒とは非常に短い時間のことをいうのである。人にとっての百年とはあっという間に流れていく短い時間のようなものである。それなのに何故、心魂を苦しめて、自ら世俗の中に身を隠すことなどしようか、というのがこの二句の言わんとすることである、と。
今調べるに、五家本・陸善経本は用の字を予に作っていた。

［注］
①**荏苒**　荏苒は、『文選』所収の潘岳「悼亡詩」に「荏苒冬春謝、寒暑忽流易。之子帰窮泉、重壤永幽隔（荏苒として冬春謝り、寒暑忽ち流易す。之の子窮泉に帰し、重壤永く幽隔す）」とあり、その李善注は「荏苒、猶漸也。冉冉、歳月流貌也（荏苒は、猶お漸のごときなり。冉冉は、歳月の流るる貌なり）」とする。
②**張華勵志詩曰…**　張華の「勵志詩」に「日与月与、荏苒代謝。逝者如斯、曾無日夜（日や月や、荏苒として代謝す。逝く者斯くの如く、曾て日夜無し）」とある。
③**漢書廣陵王胥歌曰…**　『漢書』（巻六十三）廣陵厲王劉胥傳に「王自歌曰、『欲久生兮無終、長不楽兮安窮。奉天期兮不得須臾、千里馬兮駐待路、黄泉下兮幽深。人生要死、何為苦心。何用為楽。心所喜。出入無悰為楽亟。蒿里召兮郭門閲、死不得取代庸、身自逝（王、自ら歌いて曰く、『久しく

生きんと欲するも終り無からん、長く楽まずして安んぞ窮せんや。天の期を奉じ須臾なるを得ず、千里の馬駐まりて路に待つ、黄泉の下幽深たり。人の生るるや要ず死す、何為れぞ心を苦しめんや。何を用てか楽と為す。心の喜ぶ所なり。出入悰しむこと無く楽しみを為すも亟やかなり。蒿里に召されなば郭門に閲せらる、死すれば代庸を取るを得ずして、身自ら逝く』と)」とあり、「人生要死、何為苦心(人の生るるや要ず死す、何為れぞ心を苦しめんや)」の顔師古注には「言人生必當有死、無假労心懐悲戚(言うこころは人生必ず當に死有るべし、心を労して悲戚を懐くに假ること無し)」とある。

④底本では、「予」字の右側に「為」字が書き込まれている。校勘に示したように五家本は「何為」に作る。

0506【当学衛霍将、建功在河源】

李善曰、衛衛青①。霍霍去病②也。陸賈③新語曰、以義建功。河源匈奴之境也。山海④経曰、崑崙之東北隅、実惟河源。

音決、将子亮反。

劉良曰、衛青・霍去病皆漢將。立功於西域。河源即西域。

李善曰く、衛は衛青なり。霍は霍去病なり。陸賈の新語に曰く、義を以て功を建つ。河源とは匈奴の境なり、と。山海経に曰く、崑崙の東北の隅、実に惟河源なり、と。

音決に、将は子亮の反なり、と

劉良曰く、衛青・霍去病は皆漢の將なり。功を西域に立つ。河源は即ち西域なり、と。

[校勘]

○**霍霍去病也**　「霍霍去病」(「也」字無し)〈尤刻本・国子監本・明州本・秀州本〉

○**河源匈奴之境也**　「河源匈奴之境」〈尤刻本・胡刻本・明州本・秀州本・建州本〉

○**実惟河源**　「実河海源也」〈尤刻本・胡刻本・国子監本〉。「実惟河源也」〈明州本・秀州本・建州本〉。

[訳]

李善いう、衛とは衛青のことである。霍とは霍去病のことである。陸賈の『新語』にいう、「義を貫いて功績を建てた」と。河源とは匈奴との境界の地のことである。『山海経』に、「崑崙山の東北のあたりこそが河源なのである」とある、と。

『音決』に、「将は子亮の反である」とある。

劉良いう、衛青・霍去病はともに漢の将軍である。功績を西域に立てた。ここでいう河源とは、つまり西域のことなのだ、と。

[注]

①**衛青**　衛青は平陽の人。字は仲卿。『史記』(巻百十一)衛将軍驃騎列伝に「元光五年、青為車騎將軍、擊匈奴、出上谷(元光五年、青、車騎將軍と為り、匈奴を擊たんとし、上

谷より出づ)」と、元光五年に初めて匈奴を討ったことが書かれている。その後に長平侯となった。また「最、大將軍青、凡七出擊匈奴、斬捕首虜五萬餘級(最ぶるに、大將軍青、凡て七たび出でて匈奴を擊ち、首虜を斬捕すること五萬餘級なり)」とあり、その後も六度に渡り匈奴を擊ったことがわかる。後に大将軍に任ぜられた。

②**霍去病**　霍去病は平陽の人。衛青の姉の子。武帝の時、嫖姚校尉となり、匈奴を擊った。後に驃騎大将軍となった。『史記』衛將軍驃騎列傳に「最、驃騎將軍去病、凡六出擊匈奴(最ぶるに驃騎將軍去病、凡て六たび出でて匈奴を擊つ)」とある。

③**陸賈新語曰…**　『新語』道基に「陳力就列、以義建功(力を陳べ列に就き、義を以て功を建つ)」とある。

④**山海経曰…**　『山海経』北山経に「又北三百二十里、曰敦薨之山。其上多櫻・柟、其下多茈草。敦薨之水出焉、而西流注于泑沢、出于崑崙之東北隅。実惟河源。其中多赤鮭、其獸多兕・旄牛、其鳥多鴟鳩(又た北に三百二十里、敦薨の山と曰う。其の上に櫻・柟多く、其の下に茈草多し。敦薨の水焉より出で、西流して泑沢に注ぎ、崑崙の東北の隅に出づ。実に惟れ河源なり。其の中に赤鮭多く、其の獸には兕・旄牛多く、其の鳥には鴟鳩多し)」とあり、その郭璞注に「即河水、出崑崙之虚(即ち河水、崑崙の虚より出づ)」とある。

0708【珪組賢君眄、青紫明主恩】

李曰、漢書夏侯勝曰、士病不明経。々術苟明、其取青紫如俛拾地芥。

音決、眄覓見反。組音祖。

呂向曰、珪玉也。組綬也。紫綬色也。賢君・明主皆天子也。眄顧。恩々恵也。

陸善経曰、衛青・霍去病建功絶域。君錫珪服以荅勲労。言當慕之也。

李曰く、漢書にいう夏侯勝に曰く、士は経に明らかにならざるを病む。経術苟くも明らかなれば、其れ青紫を取ること俛して地芥を拾うが如し、と。

音決に、眄は覓見の反なり。組、音は祖なり、と。

呂向曰く、珪は玉なり。組は綬なり。紫は綬の色なり。賢君・明主は皆天子なり。眄は顧なり。恩は恩恵なり、と。

陸善経曰く、衛青・霍去病功を絶域に建つ。君は珪服を錫い以て勲労に荅う。當に之を慕うべきを言うなり。

［校勘］

○珪玉也　「珪玉」(陳八郎本・明州本・秀州本・建州本)

［訳］

李善いう、『漢書』に夏侯勝が以下の様に言ったとある。「士は経術に明らかで無いことを憂う。もし経術にさえ明らかであれば、青紫の服を取って大夫となることは、下を向いて地

のちりを拾うほどに簡単なことである」と。

『音決』に、「眄は覓見の反である。組の音は祖である」とある。

呂向いう、珪とは玉である。組とは佩玉を繋ぐ紐のことである。紫は綬の色である。賢君・明主はともに天子のことである。眄とは愛顧することである。恩とは恩恵のことである、と。

陸善経いう、衛青・霍去病の二人は功績を絶域に建てたと。君主は珪服を与えることによって功績に答える。この二者を慕うべきであると言っているのである。

［注］

①**珪組**　「珪」は『説文解字』に「珪、古文圭（珪は、古文の圭なり）」とあり、同じく『説文解字』に「圭、瑞玉也。上圜。下方（圭は、瑞玉なり。上は圜。下は方なり）」とあり、その段玉裁注には「瑞者以玉為信也（瑞は玉を以て信と為すなり）」とある。

「組」は『説文解字』に「組、綬属也。其小者、以為冠纓（組は、綬の属なり。其の小なる者、以て冠纓と為す）」とあり、その段玉裁注に「大為組綬、小為組纓。其中之用多矣（大なるものは組綬と為し、小なるものは組纓と為す。其の中を之用うること多し）」とある。

「珪組」は『晋書』（巻八十六）張軌伝に「（張）茂・駿・重華、資忠踵武、崎嶇僻陋、無忘本朝。故能西控諸戎、東攘巨猾。綰累葉之珪組、賦絶域之琛賓（茂・駿・重華、忠を資り武を踵ぎ、僻陋に崎嶇して、本朝を忘るること無し。故に能く西のかた諸戎を控え、東のかた巨猾を攘う。累葉の珪組を綰ぎ、絶域の琛賓を賦す）」とある。また『文選』所収の任昉「王文憲集序」には「既襲珪組、對揚王命（既に珪組を襲い、揚王の命に對う）」とあり、その劉良注に「珪諸侯所執也。組綬。所以繫印者也（珪は諸侯の執る所なり。組は綬なり。印を繫ぐ所以のものなり）」とある。また、江淹「蕭被侍中敦勸表」に「激昂栄華之間、沈潛珪組之内（栄華の間に激昂し、珪組の内に沈潛す）」とある。

②**漢書夏侯勝曰…**　『漢書』（巻七十五）夏侯勝伝に「勝毎講授、常謂諸生曰、士病不明経術。経術苟明、其取青紫如俛拾地芥耳。学経不明、不如帰耕（勝、講授するごとに、常に諸生に謂いて曰く、士は経術に明らかならざるを病む。経術苟くも明らかなれば、其れ青紫を取ること俛して地芥を拾うが如きのみ。経を学びて明らかならざれば、帰りて耕すに如かずと）」とある。

010【終軍才始達、賈誼位方尊】

李善曰、漢書曰、終軍至長安上書。武帝異其文拝為謁者給事中。又曰、賈誼為博士。文帝悦之超遷、歳中至太中大夫。張銑曰、尊・達謂見任用也。

李善曰く、漢書に曰く、終軍長安に至りて上書す。武帝其

の文を異とし、拝して謁者給事中と為す。又曰く、賈誼博士と為る。文帝之を悦びて超遷し、歳中に太中大夫に至らしむ。張銑曰く、尊・達は任用せらるるを謂うなり。

［校勘］

○**漢書曰**　「漢書」〈建州本〉

○**歳中至太中大夫**　「┃歳中至太中大夫也┃」〈秀州本〉「歳中至太中大夫也」〈尤刻本・胡刻本・明州本〉

○**張銑曰**　「銑曰、終軍武帝拝為謁者。賈誼文帝拝為博士。尊達謂見任用」〈陳八郎本・秀州本〉

［訳］

李善言う、『漢書』に「終軍は長安に至って上表した。武帝はその文章がすぐれているとして終軍を謁者給事中にした」とある。また、『漢書』に、「賈誼は博士となった。文帝は賈誼に才能があることを喜び、位を飛び越えてその年の内に太中大夫とした」とある、と。

張銑言う、尊と達とは任用されることを言うのである、と。

［注］

①**漢書曰…**　『漢書』（巻六十四）終軍伝に「終軍字子雲。済南人也。少好学、以辯博能属文聞於郡中。年十八、選為博士弟子。至府受遣。太守聞其有異材、召見軍、甚奇之、与交結。軍揖太守而去、至長安上書言事。武帝異其文、拝軍為謁者給事中（終軍字は子雲。済南の人なり。少くして学を好み、辯博にして能く文を属るを以て郡中に聞こゆ。年十八にして、選ばれて博士弟子と為る。府に至りて遣わさる。太守其の異材有るを聞き、召して軍に見みえ、甚だ之を奇とし、与に交結す。軍、太守に揖して去り、長安に至りて上書し事を言う。武帝其の文を異とし、拝して軍を謁者給事中と為す）」とある。

②**又曰…**　『漢書』賈誼伝に「賈誼、雒陽人也。年十八、以能誦詩書属文稱於郡中。……文帝召以為博士。是時、誼年二十餘、最為少。毎詔令議下、諸老先生未能言、誼盡為之對、人人各如其意所出。諸生於是以為能。文帝説之、超遷、歳中至太中大夫（賈誼は、雒陽の人なり。年十八にして、能く詩書を誦し文を属るを以て郡中に稱せらる。……文帝召して以て博士と為す。是の時、誼年二十餘にして、最も少為り。詔令の議下る毎に、諸老先生未だ言う能わざるも、誼盡く之が為に對え、人人各おの其の意出だす所の如し。諸生是に於いて以て能と為す。文帝之を説び、超遷し、歳中に太中大夫に至らしむ）」とある。

③「尊」は、『孟子』尽心に「尊徳楽義、則可以囂囂矣（徳を尊び義を楽しめば、則ち以て囂囂たるべし）」とあり、その趙岐注に「尊、貴也（尊は、貴なり）」とある。『戦国策』秦策には「公、大臣之尊者也（公、大臣の尊なる者なり）」とあり、その高誘注に「尊、重也（尊は、重なり）」とある。

「達」は、『文選』所収の顔延之「拝陵廟作」に「早服身義重、晩達生戒輕（早く服するものは義を身につけること重

く、晩く達しするものは戒を生ずること輕し）」とあり、その李善注に「達、宦達也（達は、宦達なり）」とある。官吏として身を立て、ある程度の高い地位に登ることを「達」という。

112
11【金張服貂冕、許史乗華軒】

李善曰、左思詩曰、金張藉旧業、七葉珥漢貂。又曰、朝集金張館、暮宿許史廬。漢書劉向曰、王氏乗朱輪華殿。音決、貂音彫。冕音勉。

李周翰曰、蟬金日蟬張安世並累代仕漢。故云貂冕。許皇后・史良娣之家、並盛為奢侈。故云乗華軒也。

李善曰く、左思の詩に曰く、金張旧業を藉り、七葉漢貂を珥む。又曰く、朝に金張の館に集い、暮に許史の廬に宿る。漢書に劉向曰く、王氏朱輪に華殿に乗る、と。

音決に、貂は音彫。冕は音勉なり、と。

李周翰曰く、（蟬）金日蟬・張安世並びに累代漢に仕う。故に貂冕と云う。許皇后・史良娣の家、並びに盛んに奢侈を為す。故に華軒に乗ると云うなり、と。

［校勘］

○**左思詩**　本文の右傍らに「詠史」と書き加えられている。

○**蟬金日蟬**　各本「金日蟬」に作る。

○**故云貂冕**　「故云服貂冕」〈建州本〉
故云乗華軒也　「故云乗華軒」〈陳八郎本・明州本・秀州本・建州本〉

［訳］

李善いう、左思の「詠史詩」に、「金日蟬・張安世の子孫たちは祖先の遺業によって七代も貂の尾の冠をつけるほどの高い位にいたのである」とある。また、「朝は金氏や張氏の館に集まり、暮れには許氏や史氏の家に宿る」とある、と。漢書に劉向が「王氏は立派な宮殿で朱を施した贅沢な車にのっていた」といっている、と。

『音決』に、「貂の音は彫。冕の音は勉である」とある。

李周翰いう、金日蟬・張安世の二人は代々漢に仕えていた。よって「貂冕」というのである。許皇后・史良娣の家は、共に贅のかぎりを尽くしていた。よって「華軒に乗る」というのである、と。

［注］

①**華軒**　「華軒」は陶淵明「詠二疏」に「餞送傾皇朝、華軒盈道路（餞送するもの皇朝を傾け、華軒道路に盈つ）」とある。「華軒」とは装飾された貴族の車のことである。

②**左思詩曰…**　『文選』所収の左思「詠史」詩に「金張藉旧業、七葉珥漢貂（金張旧業に藉り、七葉漢貂を珥む）」とある。その李善注は董巴の『輿服志』を引いて「侍中・中常侍冠、武弁、貂尾為飾（侍中・中常侍の冠、武弁、貂尾もて

飾と為す）」という。また、「貂冕」は、梁元帝「和劉尚書兼明堂斉宮詩」に「貂冕交輝映、珩珮自相喧（貂冕交ごも輝映し、珩珮自から相喧す）」とある。「貂」は、『説文解字』に「貂、鼠属。大而黄黑。出胡丁零国（貂は、鼠の属なり。大にして黄黑。胡丁零国より出ず）」とある。「冕」は『春秋左氏傳』桓公二年に「袞・冕・黻・珽」とあり、その杜預注に「冕、冠也（冕は、冠なり）」とある。また、その孔穎達疏には「冠者、首服之大名。冕者、冠之別號（冠は、首服の大名なり。冕は、冠の別號なり）」とある。

③**漢書劉向曰**…　『漢書』劉向傳に「今王氏一姓乗朱輪華轂者二十三人、青紫貂弾充盈幄内（今王氏の一姓朱輪華轂に乗る者二十三人、青紫貂弾幄内に充盈す）」とある。

3456
1116【王侯貴片義、公卿重一言。太平多懽娛、飛蓋東都門】

李善曰、張景陽詠史詩曰、昔在西京時、朝野多懽娛、藹藹東都門、羣公祖二疎。呂延済曰、片議謂婁敬議都而封奉春。一言謂田千秋、一言而登卿相。歓宴。娛楽也。飛蓋東都門、謂供帳以送疎廣・疎壽也。

陸善経曰、片善一言以見進達、皆得富貴得接歓娛。守道窮居徒苦心術、不如趣勢以楽當時也。今案五家陸善経本、義為議也。

李善曰く、張景陽の詠史詩に曰く、昔西京に在りし時、朝野懽娛多し、藹藹たる東都門、羣公二疎を祖る、と。

呂延済曰く、片議は婁敬の都を議り奉春に封ぜらるるを謂うなり。一言は田千秋の一言にして卿相に登るを謂うなり。歓は宴なり。娛は楽なり。蓋を東都門に飛ばすとは、供帳以て疎廣・疎壽を送るを謂うなり、と。

陸善経曰く、片善・一言以て進達せられ、皆富貴を得て、歓娛に接するを得たり。道を守りて居に窮し、徒らに心術を苦しむるは、趣勢以て當時を楽しむに如かざるなり、と。

今案ずるに五家・陸善経本は、義を議と為すなり。

［校勘］

○**朝野多懽娛**　「朝野多歓娛」〈尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本〉

○**封奉春**　「封奉春君」〈陳八郎本・明州本・秀州本・建州本〉

○**送疎廣・疎壽也**　「送疎廣・疎受」〈陳八郎本・建州本〉「送疎廣・疎受也」〈明州本・秀州本〉

［訳］

李善いう、張協の「詠史詩」に、「昔都が長安にあったころ、朝廷でも民間でも喜ばしいことが多かった。あの立派な東都門では疎廣・疎受の二者を送るために酒盛りが行われていたのである」とある、と。

呂延済いう、片議とは劉敬が遷都を申し出て奉春君に封ぜられたことを謂うのである。一言とは田千秋が一言にして大臣に登用されたことをいうのである。歓とは安んずることをいう。娛とは楽しむことをいう。蓋を東都門に飛ばすというのは、宴を開いて疎廣・疎受の二者を送り出したことをいうのである、と。

陸善経いう、片善・一言は、官吏に登用され、みな富を得てたのしむことを得たことをいうのである。道を守って住む所にも苦しみ、無駄に心魂を苦しめることは、時勢に従ってその時を楽しむことに及ばない、と。

今調べるに、五家本・陸善経本は、義を議に作っている。

［注］

①**二疎**　「二疎」は疎廣・疏受のこと。『漢書』疎廣伝に「疏廣字仲翁。東海蘭陵人也。……廣兄子受、字公子（疏廣字は仲翁。東海蘭陵の人なり。……廣の兄の子受、字は公子）」とある。

②『漢書』婁敬伝に「婁敬斉人也。……高帝問羣臣。羣臣皆山東人、争言周王数百年、秦二世則亡。不如都周。上疑未能決。及留侯明言入関便、即日駕西都関中。於是上曰、本言都秦地者婁敬。婁者劉也。賜姓劉氏、拝為郎中、號曰奉春君（婁敬は斉人なり。高帝羣臣に問う。羣臣皆山東の人にして、争いて周王は数百年、秦は二世にして則ち亡ぶ。周に都するに如かずと言う。上疑いて未だ決する能わず。留侯の関に入るは便なりと明言するに及びて、即ち日に西に駕して関中に都す。是に於いて上して曰く、本秦地に都することを言う者は婁敬なり。婁は劉なりと。姓劉氏を賜りて、拝せられて郎中と為り、號して奉春君と曰う）」とある。

③『漢書』車千秋伝に「車千秋、本姓田氏。其先斉諸田徙長陵。千秋為高寝郎。會衛太子為江充所譖敗、久之、千秋上急変、訟太子冤曰、「子弄父兵、罪當笞。天子之子過誤殺人、當何罪哉。臣嘗夢見一白頭翁、教臣言」。是時、上頗知太子惶恐無他意、乃大感寤、召見千秋。至前、千秋長八尺餘、體貌甚麗、武帝見而説之、謂曰、「父子之間、人所難言也。公獨明其不然。此高廟神霊使公教我。公當遂為吾輔佐」。立拝千秋為大鴻臚。数月、遂代劉屈氂為丞相、封富民侯。千秋無他材能術学、又無伐閲・功労、特以一言寤意、旬月取宰相封侯。世未嘗有也。（車千秋、本姓は田氏。其の先斉の諸田の長陵に徙る。千秋高寝の郎と為る。會たま衛太子江充の譖敗する所と為り、之を久しくして、千秋急変を上し、太子の冤を訟して曰く、「子、父の兵を弄ばば、罪として當に笞べし。天子の子過誤して人を殺さば、何の罪にか當らんや。臣嘗て夢に一白頭翁を見、臣をして言わしむ」と。是の時、上頗ぶる太子の惶恐して他意無きを知り、乃ち大いに感寤し、召して千秋を見る。前に至りて、千秋の長八尺餘、體貌甚だ麗にして、武帝見て之を説び、謂いて曰く、「父子の間、人の言い難き所なり。公獨り其の不然を明らかにす。此れ高廟の神霊公をして我に教えしむ。公當に遂に吾が輔佐と為るべし」と。立ちどころに千秋を拝して大鴻臚と為す。数月にして、遂に劉屈氂に代りて丞相と為り、富民侯に封ぜらる。千

秋に他の材能術学無く、又た伐閥・功労無く、特だ一言を以て寤意せしめ、旬月にして宰相を取り侯に封ぜらる。世に未だ嘗て有らざるなり）」とある。

1718【顧念張仲蔚、蓬蒿満中園】

李善曰、曹子建贈徐幹詩曰、顧念蓬室士、趙岐三輔決録注曰、張仲蔚扶風人也。少与周郡魏景卿隠身不仕。明天官博物、好為好賦。所居蓬蒿没人。
音決、蔚音尉。蒿反。
劉良曰、顧念其貴才。

李善曰く、曹子建の贈徐幹詩に曰く、顧りみて蓬室の士を念うと。趙岐の三輔決録の注に曰く、張仲蔚は扶風の人なり。少くして周郡の魏景卿と身を隠して仕えず。天官に明らかに博物にして、好賦を為るを好む。居る所の蓬蒿人を没す、と。
音決に、蔚の音は尉。蒿□□の反なり、と。
劉良曰く、其の貴才を顧念するなり、と。

［校勘］
○**趙岐三輔決録注曰**　「趙政三輔決録注曰」〈建州本〉
○**少与周郡**　「少与同郡」〈尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本〉
○**明天官博物、好為好賦**　「明天官博学、好為詩賦」〈尤刻本・胡刻本〉　「明天官博物、好為詩賦」〈国子監本・明州本・秀州本・建州本〉
○**所居蓬蒿没人**　「所居蓬蒿没人也」〈尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本〉
○**音決、蔚音尉。蒿反**　蒿字の傍らに「呼高」と書き込まれている。
○**顧念其貴才**　「顧念念其遺才」〈陳八郎本・明州本・秀州本・建州本〉

［訳］
李善いう、曹植の「贈徐幹」詩に、「蓬室の士のことが思い起こされる」とある。趙岐の『三輔決録』の注に、「張仲蔚は扶風の人である。若くして周郡（同郡）の魏景卿と供に隠遁して出仕しなかった。天文に明らかであり、広く物事に精通して、よい賦を制作することを好んだ。彼が住んでいた場所は蓬が生い茂っていて人の背丈も越すものであった」とある、と。
『音決』に、「蔚の音は尉である。蒿は（呼高）の反である」とある。
劉良いう、その貴い才能を思い起こすのである、と。

［注］
①**張仲蔚**　「高士伝」に「張仲蔚者平陵人也。与同郡魏景卿、俱修道徳、隠身不仕。明天官博物、善属文、好詩賦。常

居窮素、所處蓬蒿没人。閉門養性、不治栄名。時人莫識。唯劉龔知之（張仲蔚は平陵の人なり。同郡の魏景卿と、倶に道徳を修め、身を隠して仕えず。天官に明らかに博物にして、善く文を属り詩賦を好む。常に窮素に居り、處る所の蓬蒿人を没す。門を閉ざしてて性を養い、栄名を治めず。時の人識る莫し。唯だ劉龔のみ之を知る）」とある。また、陶淵明「詠貧士」其六に「仲蔚愛窮居、遶宅生蒿蓬。翳然絶交遊、賦詩頗能工（仲蔚窮居を愛し、宅を遶りて蒿蓬生ず。翳然として交遊を絶ち、詩を賦するに頗る能く工なり）」とある。また、江淹の「詣建平王上書」に「子陵閉關於東越、仲蔚杜門於西秦。亦良可知也（子陵は關を東越に閉ざし、仲蔚は門を西秦に杜ざす。亦良に知る可きなり）」とある。

（筑波大学大学院人文社会科学研究科博士課程）

『文選集注』江淹「雑体詩」
（二〇一〇―一一年度）演習参加者（五十音順）

荒井　禮（あらい・れい）
加藤　文彬（かとう・ふみあき）左思担当
逆瀬川彰子（さかせがわ・あきこ）
重野　宏一（しげの・ひろかず）陸機担当　ＴＡ
花岡　亜希（はなおか・あき）